

フランスのポルトガル系移民の学校適応
政治家の事例から
School Adaptations of Portuguese Migrant Children in France
: Cases of Portuguese Politicians

鈴木 規子 (東洋大学)

SUZUKI Noriko (Toyo University)

キーワード : ポルトガル系移民、教育、フランス

フランスに居住するポルトガル系移民は、人口がヨーロッパ系移民最大の規模でありながら、存在が「認められない」といわれるほど、フランス社会への統合に成功した「モデル・マイノリティ」といえる。ムスリム系移民と人口の多さでは引けを取らないが、ポルトガル移民はなぜ問題が少ないのか。そこで、フランスのポルトガル系政治家をポルトガル移民の中の「モデル」ととらえ、彼らへの聞き取り調査を通じて、家族の移住経緯、生活、教育歴から、彼らの社会統合の成功要因として教育における「学校適応」について報告する。

1. 在仏ポルトガル系移民の概要

ポルトガル移民は、ポルトガルの長期独裁体制下における貧困と植民地戦争への徴兵から逃れるため、1960年代～1970年代半ばという一時期に大量にフランスへ移住してきた。

いずれ帰国したいという願望は強く、バカンスごとに帰郷する者が多いが、実際にはフランスに定住化し、子どももフランスで育っている。そのため、ポルトガル国籍のみの者が近年 50 万人を割り減少傾向にあるのに対して、増加しているのが二重国籍者（約 32 万人）とフランス国籍のみのポルトガル出身者（約 39 万人）である（2008 年）。

移民世代は単純労働従事者が多く、ポルトガル移民といえば「左官、管理人、家政婦」というステレオタイプがフランスにはある（Cordeiro、1997）。就業率は男女ともに外国人の中でも高く、フランス人よりも高い（鈴木、2007）。

2. 移民の子どもに関する学力や就職に関する先行研究

ヨーロッパにおける移民の子どもの学力調査（OECD、2011）によれば、移民やその子どもは、移民ではない親の子どもよりも学力が低い傾向がみられた。また、教授言語と異なる言語を家庭で話す移民の子どもや、社会的経済的背景において不利な移民の子どもの場合、学力格差がより大きく表れた。

「ヨーロッパにおける移民二世代の社会統合に関する国際比較研究」（TIES プロジェクト）では、欧州 8 か国の都市におけるモロッコ系、トルコ系、旧ユーゴスラビア系の二世代を対象に、教育、労働市場、家族、アイデンティティ、宗教から社会統合について比較分析をしている（Crul et al、2013）。この研究では、とくにトルコ系が就職の際にエスニシティによって差別を受ける「エスニック・ペナルティ」を負っていることが指摘されていた（Lessard-Phillips、et al、2013）。

3. 移民世代と子ども世代との比較からみたポルトガル系移民の学校適応

幼少期にフランス語を話していた割合は移民平均より低く、移住時に、フランス語の会話や筆記ができた割合もだいぶ低かった (INSEE、2012)。この点はスペイン・イタリアといった南欧出身者とは異なり、むしろトルコ出身者と類似していた。しかし、移住後にフランス語の会話の改善が見られた点ではトルコ出身者と違いがみられた。なお、家庭において母語の継承が見られるのもトルコ出身者と似ている。

また、トルコ出身者と共通して、ポルトガル出身者は低学歴や無資格の者が多い。その理由は、ポルトガル移民のほとんどが貧困のため母国で小学校すら十分通えず、出国後も働いてきたためである。労働への価値が非常に高く、子どもに対してもフランスで義務教育を終えることは望んでいるが、それ以上は望まず、早く労働市場に出ることを望んでいる。そのため普通科よりも職業科に進む傾向がある (Birnbbaum, 2012)。しかし、就学期間中に職業資格を取得する者が多いため、就業率は男女ともに高い。

4. ポルトガル系政治家への聞き取り調査から得られた知見

親の学歴は低いが、ポルトガル系政治家は、資格を取得し、学歴も高い傾向がみられた。彼らの学校適応の背景には、家族の理解、フランス社会への統合がみられた。とくに、ポルトガル人の典型的な職業を通じて、フランス人の「成功」の流儀を見聞きする機会が多かった点に注目する。とくに母親の役割は大きく、「学校でよく勉強し、資格を取る」というフランス人のハビトゥスを実践したことによって、親よりも長く学校教育を受け、資格を取り、フランス人と同じような職業に就いていた。同時に、親は就学が長期化することは望んでいない。この点は他の移民の親と異なり、ポルトガル移民の特徴であるといえる。

【参考文献】

- Birnbbaum, Y., Moguérou, L., Primon, J-L., (2012) « Les enfants d'immigré ont des parcours scolaires différenciés selon leur origine migratoire », in INSEE, pp. 43-57.
- Bouvier, Gérard (2012) « Les descendants d'immigrés plus nombreux que les immigrés : une position française originale en Europe », in INSEE, pp.11-26.
- Cordeiro, Albano(1997) « Les apports de la communauté portugaise à la diversité ethno-culturelle de la France », in *Hommes & Migrations*, No.1210, novembre-décembre, pp.5-17.
- Crul, M., J. Schneider, and F. Lelie (eds.) (2012) *The European Second Generation Compared. Does the Integration Contexte Matter?*, Amsterdam University Press.
- INSEE (2012) « *Immigrés et descendants d'immigrés en France* », Paris : INSEE
- Lesserd-Phillips, R. Fibbi and Ph. Wanner (2012) “Assessing the labour market position and its determinants for the second generation”, in Crul, et al., pp.165-224.
- OECD (2011) 『移民の子どもと格差—学校をさせる教育政策と実践』明石書店.
- 鈴木規子(2007) 『EU 市民権と市民意識の動態』慶應義塾大学出版会.